



富山県福岡町

下向田古墳群

試掘調査概報

1985年

福岡町教育委員会

序

人々の営みのあるところ、無数の文化財が存在します。これらは私達の祖先がきびしい環境の中で、不斷の努力と優れた知識によって開拓し、創造してきた文化的遺産です。この貴重な文化遺産は時の流れと共に、変化し、忘れられ、あるいは破壊され消滅していくおそれのあるものです。だからこそ、隠された文化財を見い出し、これを守り次代の人々に伝える。これが現在に生きる私達の責務であると信じます。

この下向田古墳群は、これまで3回にわたって調査が行なわれ、群集墳のあり方の一端を教えてくれています。この貴重な遺跡は町民公園に取り入れ保存することにいたしました。多くの皆様に親しんでいただき学習に活かされることを願うものです。また本書が文化財保護のご理解の一助となれば幸いに存じます。

最後に、調査の実施にあたりご理解とご協力をいただいた地元の方々や関係機関各位に対して厚くお礼を申し上げます。

昭和60年3月

福岡町教育委員会

教育長 高井 幹夫

例　　言

1. 本書は富山県西砺波郡福岡町下向田に所在する下向田古墳群の試掘調査概報である。
2. 調査は国庫及び県費補助金の交付を得て、福岡町教育委員会が実施した。
3. 調査の実施にあたって、富山県埋蔵文化財センターから調査担当者の派遣を受けた。
4. 調査事務局は福岡町教育委員会に置き、派遣社会教育主事荒川昌夫、社会教育主事岡山哲朗が調査事務を担当し、教育次長竹田照明が総括した。
5. 発掘調査は富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事宮田道一が担当した。調査期間中、同センター主任上野章・文化財保護主事斎藤隆の参加・協力を得た。
6. 調査期間は次のとおりである。

昭和59年5月15日から6月11日の18日間

発掘調査

昭和59年10月27日から11月20日の7日間

埋め戻し

6. 調査から整理期間中、富山大学人文学部助教

授和田晴吾氏、富山考古学会員西井龍儀氏のご指導とご助言を受けた。記して謝意を表します。

7. 古墳の地形測量は北陸航測株式会社が実施した。
8. 本書の編集・執筆は宮田が担当した。本書作成中、富山県埋蔵文化財センターの職員及び臨時職員の協力を得た。

目　　次

I. 遺跡の位置と環境	1
II. 調査の経緯	2
III. A地区	4
IV. B・C地区	7
V. D地区	8
VI. まとめ	9

写真図版

発掘調査参加者一覧

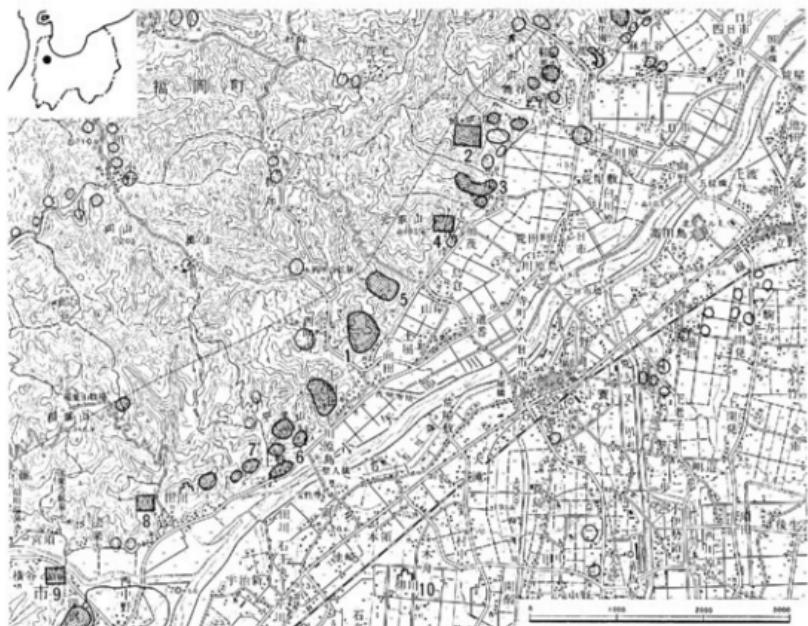
浅見和弘・池田きみ・池田政吉・伊藤浩信・岡村元治・岡山とみ子・小泉靖広・柴田文夫・富田清志・永井昌宏・中谷隆志・西方正弘・廣瀬正宣・森田信・矢竹澄子・山崎孝志・山崎とき・横山正行・吉沢悟志・吉沢齊・吉江武彦・吉田涉・横山とき

I. 遺跡の位置と環境

福岡町は県西部にあり、南側の平野部と北側の山地部で構成されている。平野部は砺波平野の末端部にあたり、南西から北東に流れる小矢部川が横断している。山地部は小矢部川左岸の北側に位置し、山並みが県境まで続く。

遺跡は特に山地部に多く見られる。下向田古墳群はその山地部が平野部に接する所にあり、小矢部川左岸沿いに北南に続く標高100~200mの低丘陵上に立地する。その丘陵の頂部には古墳群が、斜面地には横穴墓群が交互に重なっている。北は東上野古墳群から南は閔野・若宮古墳群まで300基以上の古墳群・横穴墓群がある。古墳群には上野古墳群・上向田古墳群などがある。上向田古墳群の内に、12世紀の珠洲の蓋付経筒が出土した上向田経筒[西井1967]を含んでいる。横穴墓群には城ヶ平横穴墓群・加茂横穴墓群がある。城ヶ平横穴墓群からは多数の副葬品、人骨とともに、銀象嵌を施した鉄製頭椎柄頭が出土している。山地部の深まった所には先土器時代の小野向畠B遺跡、繩文時代早期の小野向畠A遺跡・中期~晚期の砂子谷II遺跡がある。なお、上記の低丘陵上からは、平野部を一望できるため、中世の山城がその上に点々とある。

平野部には繩文時代前期・中期の上野A・B遺跡、奈良~平安時代の古村赤丸遺跡、中世の平城である木舟城跡がある。



第1図 位置と地形

1. 下向田古墳群 2. 城ヶ平横穴墓群 3. 馬場古墳群 4. 加茂横穴墓群 5. 土屋古墳群
6. 上野古墳群 7. 上向田古墳群 8. 田川横穴墓群 9. 桜町横穴墓群 10. 木舟城跡

II. 調査の経緯

1. 調査に至る経過

従来から、小矢部川左岸の段丘上に古墳群と横穴墓群が点在することが知られていて、古墳の分布地域から「小矢部ブロック」と呼ばれている〔吉岡1972〕。「二上・水見ブロック」に次いで古墳が多いことが知られている（121基の古墳で構成されている）。

しかし、近年、富山考古学会会員西井龍儀氏の精力的な分布調査によって、北は東上野古墳群から、南は若宮古墳群まで、300基以上の古墳があることが判明した。下向山古墳群もその中の1つで、昭和53年ごろに確認されている。1号墳～5号墳がそれにあたる。

さて、福岡町はソフトボール場、フィールドアスレチック広場を含む町民公園とその北側に墓苑を計画していた。昭和56年度から、公園内の幹線道路建設を実施しようとした。しかし、当該公園地内には下向山古墳群があるため、福岡町建設課・教育委員会は、県教育委員会文化課・埋蔵文化財センターと協議を重ねた。その結果、現状で確認されている古墳や古墳状の高まりについて試掘調査を行ない、古墳の範囲が確認されれば、それを取り入れた公園計画を考えることで、両者は合意した。その合意に基づき、埋蔵文化財センターは、昭和57年5月13日から31日まで、1～4号墳・7号墳の試掘調査を行なった。古墳6基と古墳状の高まり1基を確認した。2号墳は23m×26mの方墳で、古墳群の中でも最大規模のものであることが判った。

この試掘結果に基づき、県と協議を重ねた町は、2・3号墳のかかるソフトボール広場を多目的広場に計画変更し、古墳を現状保存した。しかし、その計画場所の変更のため、その広場に係る4・6号墳についての発掘調査と当該事業地内の古墳の分布調査とを町は県に要望した。

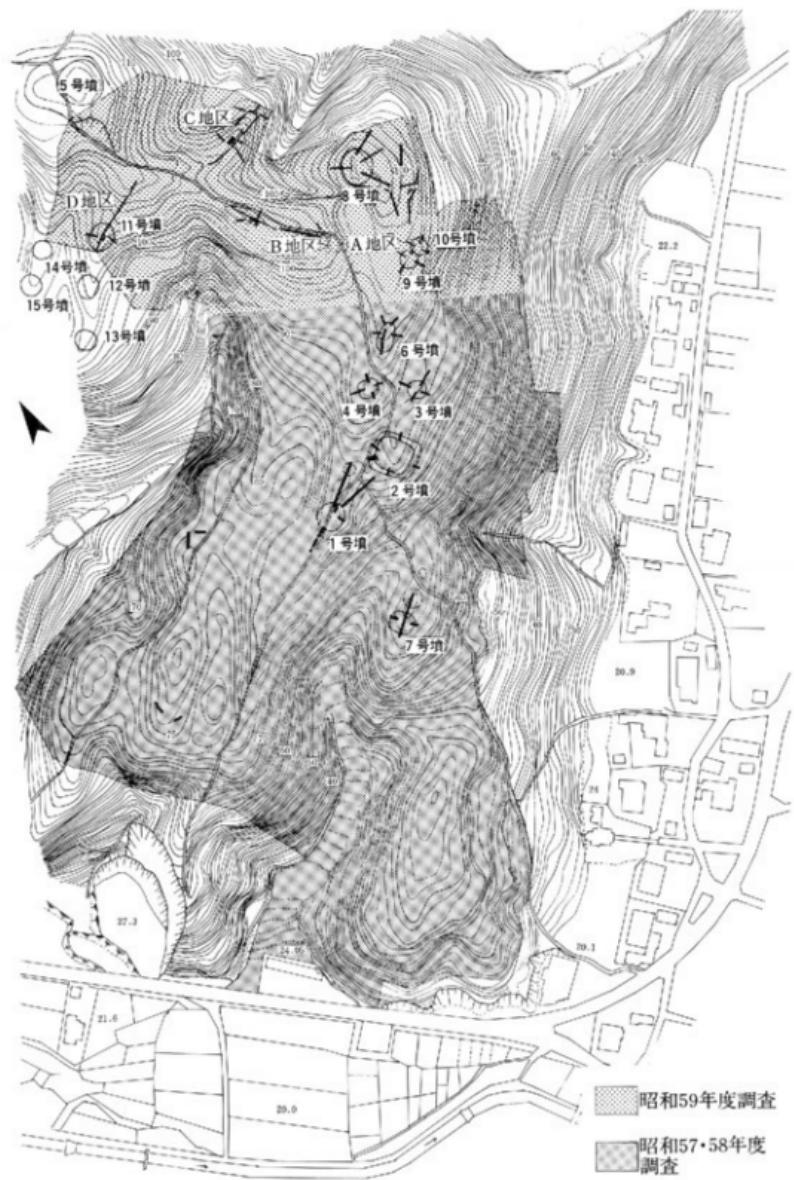
そこで、埋蔵文化財センターは昭和58年11月7日から12月17日にかけて4号墳の本調査と6号墳の確認調査と古墳分布調査を行なった。その結果、新たに発見された古墳（9～15号墳）は公園以外の墓苑予定地内にも存在することが判明した。町では近々、墓苑計画も進めるため、町環境保健課も加わり、県と協議を重ねた。その結果、町は本年度、公園及び墓苑地内にある古墳の保護措置を講じるため、古墳の試掘調査を行なうこととした。

2. 調査の経過

今回の調査は過去の発掘調査結果を踏まえて行なった。過去の調査によれば盛上の確認できる古墳の他に、耕作等により盛土が流出してしまい、盛土が明確に分らなく、しかもその周溝もわずかな跡みしかもない古墳があることが判った。現状観察からでは盛土のあることが期待できないので、後者の古墳の場合を考えて調査を進めた。しかも、発掘面積は最少限に留めるため、周溝と考えられる落ち込みが一部でも確認できれば、調査はそこでストップした。

調査は伐採を行なった後、古墳上のたかまりの標にトレントを入れ、周溝を確認した。その周溝が確認できない場合には、頂部と思われる平坦地にトレントを入れ、主体部の有無を確認した。

発掘調査は昭和59年5月15日から6月11日まで終り、発掘面積は約400m²であった。その後、埋め戻しは10月27日から11月20日まで行なって、調査は終了した。



第2図 地形と発掘区(1/3,000)

III. A地区

1. 地形（第4図）

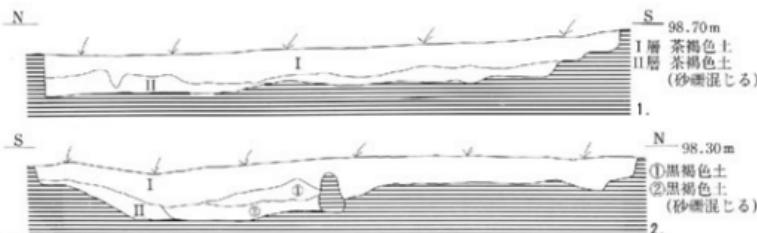
4・6・8～10号墳は北東方向に延びるやや広い尾根に立地する。この尾根の幅は12mぐらいだが、広い所では20mにも達する。尾根からは南東方向に平野部を見下ろせ、平地との比高差は80mである。南の4号墳と北の8号墳とは10mの比高差がある。尾根の南側は急峻な崖になっていて、9・10号墳のすぐ北側では昭和の初めごろ崖くずれがあったという（地元の人の話）。尾根の西側は浅い谷が入っていて、谷底とは2～10mの比高差がある。

2. 遺構と遺物（第3・5・8図、図版1～3・6）

9・10号墳 6号墳の東方約40mにある。幅10mの平坦面の南側の急峻な崖際に立地する。標高98mである。現状では50cmぐらいの僅かな高まりが2ヶ所に見られる。9号墳は10号墳より約80cm高いが、その間は僅かな窪みが見られる。現状では表土に地山の砂礫層が露出していることからも古墳の盛土は想像できなかった。調査は頂部をさけてトレンチを十字に入れて行なった。9号墳は表土（I層）、茶褐色土（II層）の下が地山に達する。地山までは20～40cmである。II層には地山の砂礫が混じっている。1トレでは20cm下で地山に達する。2トレの断面図（第3図）では周溝が明確でないが、地山に僅かな窪みが確認できる。この窪みは幅40cm、深さ10cmであるが、その覆土はII層と同じ土である。3トレでは崖の斜面に沿って地山が急勾配になっている。頂部から5m下の所で急に段が付いている。2トレの窪みと3トレの段を生かして考えると、約8mの古墳の可能性がある。4トレでは幅50cm、深さ20cmの溝が確認されているが、この溝は表土からの掘り込みで、その覆土はボソボソの黒色土である。

10号墳は北側が少し窪んでいたり、見た目には高まりを感じる。尾根の6トレは3トレのような段は確認できなかった。7トレではI層だけで地山に至るが、地山が少し窪んでいる所があり、茶褐色の土が入っている。これを溝と考えれば幅80cm、深さ20cmとなる。5トレではII層を掘り込んだ溝が確認できる。溝は幅1.4m、深さ40cmであり、その覆土は黒褐色土である。5・7トレの溝を周溝と考えると約8mの古墳となる可能性がある。

なお、9・10号墳とも盛土が確認されていないが、今回の調査では古墳の可能性があることが判った。しかし、両方の古墳のトレンチからは遺物が出土しなかった。



第3図 A地区土層図(1/50) 1. 2トレンチ 2. 5トレンチ



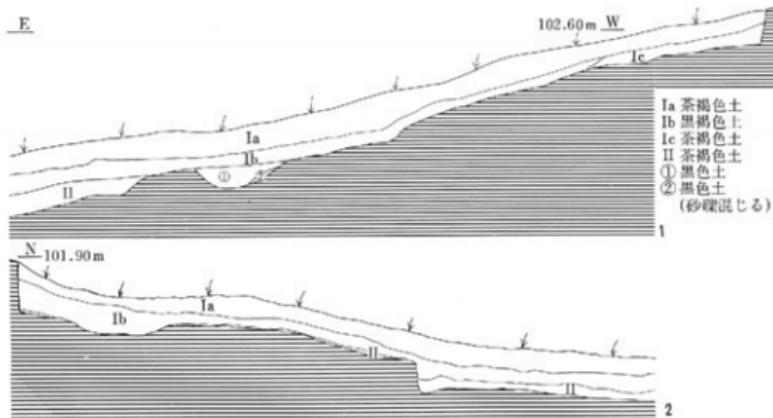
第4図 A地区の地形と発掘図(1/500)

8号墳 A地区の尾根の奥にあり、一番高い所に立地する。標高103mである。4・6号墳からは9・10号墳までを直線的に見えるが、8号墳を遠望できない。8号墳の東側は急峻な崖になっている。崖の下は平地から入り込んで深い谷である。9・10号墳から見ればあまり高まりは感じないが、8トレ付近だと小高い高まりが明瞭に見える。頂部は平坦である。19トレの北側には浅い谷があり、谷底と頂部との比高差は約10mである。

19トレではII層が確認できなく、I層(40cm)の直下が地山となる。溝も確認できない。16トレも19トレと同様に溝は確認できなかった。15トレでは幅80cm、深さ20cmの溝が検出された。その覆土は黒色土である。14トレの北端では幅80cm、深さ10cmの地山の窪みがある。周溝とも考えられるが、この上に山道が走っている点から旧山道の窪みと考えられる。この窪みから2m南に地山に段ができる。この段と15トレの溝を生かして考えると、直径14mの古墳の可能性がある。この8号墳のトレンチからは遺物が出土しなかった。なお、16トレの南端で焼窓穴が2個確認できた。1つは直径70cm、深さ40cmの円形の穴である。壁面は焼けて赤化になっており、底面には炭の層が溜っている点から、この穴は伏焼法の炭焼窓と考えられる(岸本1976)。

その他、14トレの南端に落ち込みがある。幅3.6m、深さ80cmである。覆土中には焼上・炭屑が見られる。13トレではその落ち込みのつづきが確認できなかった。この溝状造構と13トレから縄文時代の石器や早期の押型文土器破片(1個体)が出土した(第8図・図版6)。押型文土器(I)は甕の口縁部のみである。口唇部に山形文を、口縁部は山形文間に無文帯をつくる。胎土は纖維を含まず、器面の風化は激しい。その土器は14トレのみで面的な広がりは確認できなかった。石器には圓石(3・4)と磨石(5・6)がある。

8号墳の南側には小さな張り出し部分があり、古墳の有無を確認するためトレンチを設けた。9トレ・11トレで性格不明の落ち込みを検出したが、古墳の存在は確認できなかった。



第5図 A地区土層図(1/50) 1. 15トレンチ 2. 14トレンチ

IV. B・C 地区

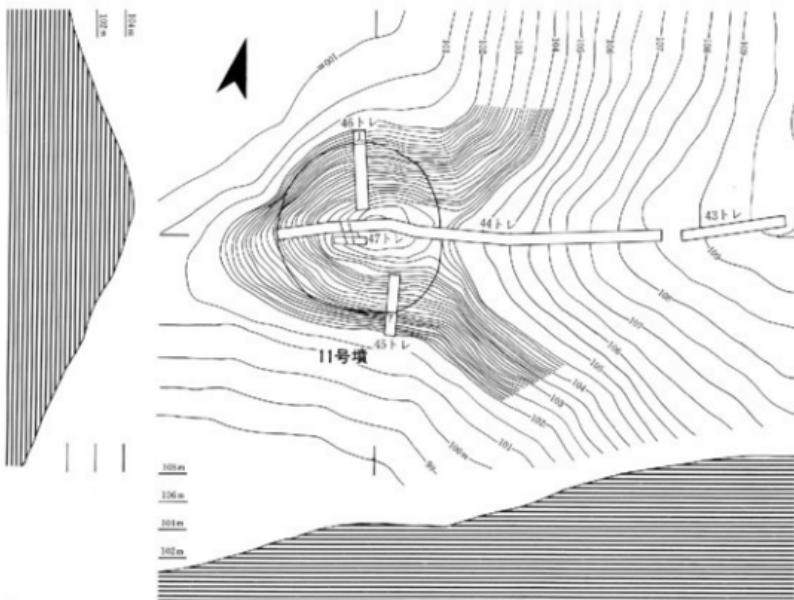
1. B地区 (第2・8図・図版4・6)

B地区はA地区の北側にあり、やせ尾根が南北に延びる。標高103~106mである。北西側は墓苑に通じる道路のため、斜面が削られ崖になっている。僅かに確認できた高まりの裾にトレンチを入れたが盛土・周溝は確認できず、さらに頂部の平坦面を発掘したが、主体部も確認できなかった。この地区的高まりは古墳でないことがわかった。22トレでは焼壁穴が2ヶ所検出した。その穴の覆土には炭が含まれておらず、A地区の焼壁穴とは性格を異にすると考えられる。

この穴付近から縄文時代の石鏃(2)が出土した。有茎の石鏃で、先端が欠損している。石質はチャートである。この形の石鏃は縄文時代後・晩期によく見られる。

2. C地区 (第2・8 図版4・6)

C地区はA地区の北側で、深い谷を隔てて8号墳が正面に見える位置にある。東西に延びる尾根の先端部にある。標高103mである。北側の浅い谷底とは約5mの比高差がある。古墳と考えられる場所に十字にトレンチを入れたが、盛土・周溝は確認できなかった。20~40cmのI・II層の直下で地山になる。頂部の平坦面にトレンチを入れたが、主体部は検出できなかった。以上から、この高まりは古墳でないことが判明した。



第6図 D地区の地形と発掘区(1/500)

トレンチから円形の焼壁穴が1個と幅20~50cm、深さ20~50cmの溝が3条検出された。この溝は表土から掘り込んでいて、「U」字の形状をしている。この溝は形状、覆土、立地から考えて、小杉町南太閤山I遺跡〔富山県1983〕でも見られる山境の溝と考えられる。

発掘区から須恵器杯身の破片(7)が出土している。口径12cm、器高2.8cmで、内外面にヨコナデを行う。内面に油煙が付着している。平安時代であると考えられる。

V. D地区

1. 地形 (第6図)

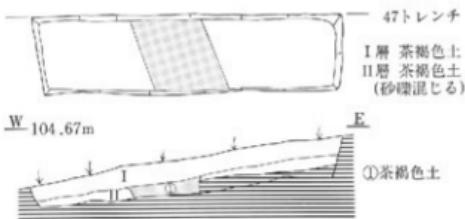
D地区はB地区の北側にあり、やせ尾根が東西に延びている。標高104~110mである。南側は平地からの深い谷が入る。北側は浅い谷が入り、約7mの比高差がある。この尾根の東側は高く、西側とは約6mの比高差がある。11号墳の西側は民有地であり、調査対象外である。

2. 遺構と遺物 (第7・8図、図版5・6)

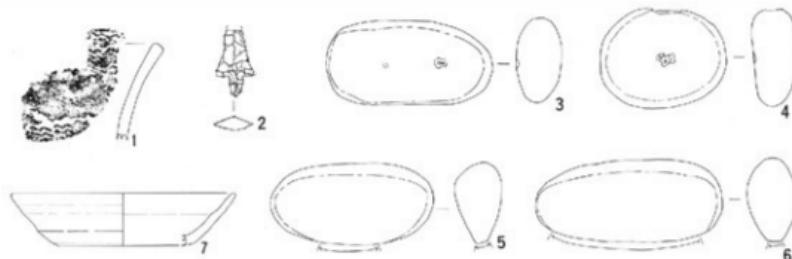
D地区の東側は高くなっているため、43トレを設けたが、I層(30cm)・II層(30cm)で地山に至り、遺構、遺物は確認できなかった。やせ尾根の中央を縦断するように44トレを設けた。西側の高まりの頂部付近で覆土が茶褐色土の落ち込み(第7図)が検出された。それは表土であるI層(20cm)の下から掘り込んでいる。47トレでもその落ち込みが確認できた。幅60cmで長さ2m以上あり、主体部と考えられる。45トレ・46トレでは

は地山が自然の傾斜に沿って傾き、途中で段がつくことが確認できた。

しかし44トレでは盛土・周溝が確認できなかった。44トレの主体部と45・46トレの段を生かして考えれば、11号墳は10mの古墳であると考える。なお、44トレからは縄文時代中期の土器片(図版6-8)が出土した。



第7図 遺構と土層図(1/50)



第8図 遺物実測図(1・7, 1/3, 2, 1/2, 3~6, 1/8)

VI. まとめ

下向田古墳群には、現状観察から盛土の高まりを確認できる古墳以外に、わずかな高まりしか確認できない古墳がある。後者の古墳の場合、周溝の掘り込みが浅く、盛土も厚くないため、耕作等によって盛土が削平を受けていることが多い。周溝の掘り込みが浅いため、トレンチでは確認がむずかしく、面的調査によらなければ明確にならない場合もある。本年度調査の古墳群はそのようなあり方を示しているものが多い。類例は小杉流団No.3・7遺跡の古墳群[富山県1982]があり、明確な周溝はあるが、盛土は確認できなかった。

本古墳群は立地から1~4、6~10号墳と5、11~15号墳の2群に分かれる。各尾根には2~3基の古墳で構成されている。その中でも2号墳が最大規模である。また、古墳の年代は遺物が出土していないので不明である。最近、県内では5世紀後半から6世紀前半の群集墳が確認されている[富山県1982・西井1983]が、本古墳群付近には6世紀前半の上野古墳群や6世紀末から7世紀の横穴墓群があり、本古墳群との関連も考慮しなければならない。以上から、本古墳群の年代や群構成については今後の検討課題である。

引用文献

- 岸本定吉 1976 「炭丸の内出版」
- 富山県教育委員会 1982 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要」
- 富山県教育委員会 1983 「都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要」
- 西井龍儀 1967 「福岡町上向田経塚について」 オジャラ2
- 西井龍儀 1983 「二上山周辺の古墳」 「昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報」高岡市教育委員会
- 福岡町史編纂委員会 1969 「福岡町史」 福岡町
- 古岡英明 1972 「古墳時代」 「富山県史考古編」 富山県

古墳名	調査年度	墳形	規 模 (m)		周 溝 (m)		盛土の有無	備 考
			長軸	短軸	幅	長さ		
1号墳	S57	円	13	13			50cm	墳頂に幅1mのテラス状の成形面がある。
2号墳	*	方	26	23	2	2	有	古墳群中で最大規模。西側斜面はテラス状になる。墳丘は2~6mの高さ。
3号墳	*	方	8	7	1.5	1	50cm?	表土より鍾乳片出土。
4号墳	S57・58	円	8	8	1	0.3	50cm	主体部は擾乱を受けていて不明。 擾乱穴から鉄釘2点出土。
5号墳								当該事業地区外
6号墳	S57・58	長円	20	10			有	
7号墳	S57	方	10	10	—	—	50cm	主体部を確認。
8号墳	S59	円?	14	14	0.8	0.2	—	
9号墳	*	円?	8	8	0.4	0.1	—	
10号墳	*	円?	8	8	0.8	0.2	—	
11号墳	*	円?	10	10	—	—	表土より縄文土器片出土。主体部を確認。	
12号墳								当該事業地区外
13号墳								—
14号墳								—
15号墳								—

表1. 下向田古墳群一覧



9・10号墳発掘前(北から)



9・10号墳発掘後(東から)



2 トレンチの溝(東から)



7 トレンチの溝(北から)



8号墳発掘後(南から)



15トレンチの溝(東から)



B地区発掘後（北から）



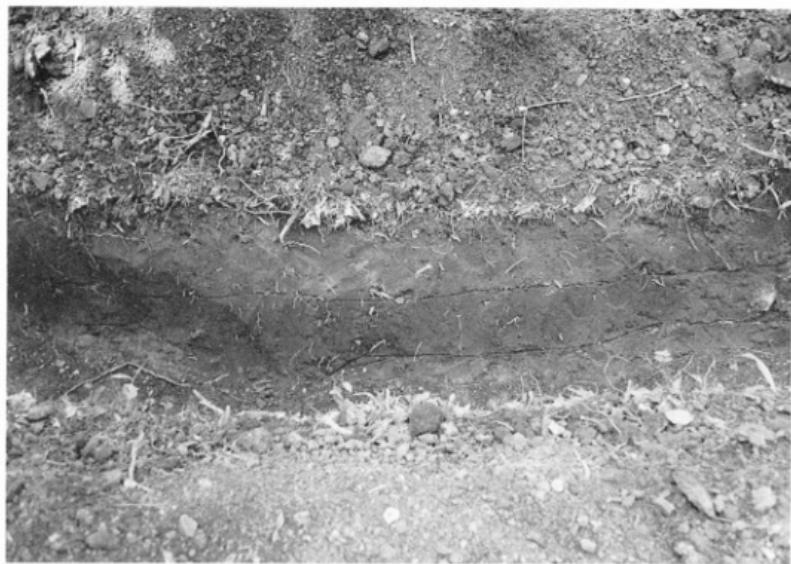
C地区発掘後（東から）



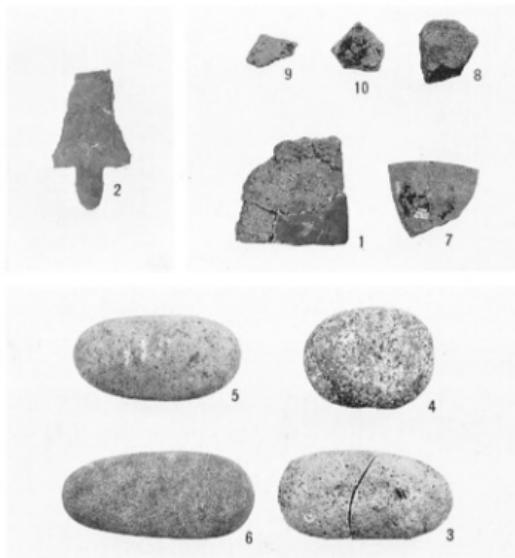
11号墳発掘前(西から)



44・47トレンチの遺構(東から)



44 トレンチの土層(南から)



出土遺物(A~D地区)

富山県福岡町

下向田古墳群

試掘調査概報

発行日 昭和 60 年 3 月 30 日

編集者 富山県埋蔵文化財センター

発行者 福岡町教育委員会

印刷者 御日本海印刷